

リハビリテーション科（選択）

研修科	リハビリテーション科（選択）
責任者	教授 福田 寛二
指導医数	6 名
研修期間	4 週間
受入可能人数	2 名
到達目標	<p>医師として責務を自律的に果たす使命感と倫理観をもち、信頼され、尊敬される医師になることを目標に、基本的診療業務ができるレベルの医学の知識と技能を修得する。患者や医療関係者とのコミュニケーション能力を備え、互いの意見を尊重し、チーム医療の一員として行動できるようになること。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 医師としての倫理観・責任感・使命感をもって行動できる。</li> <li>2. プライマリ・ケアを実践できる基本的診療能力（知識、技能、態度）を身につける。</li> <li>3. 医療における安全管理の方策を理解し、患者ならびに医療従事者にとって安全な医療を遂行できる。</li> <li>4. 能動的に行動し、見出した疑問点や問題点については、意義を検証する。</li> <li>5. 医療チームの構成員としての医師の役割を理解し、他のメンバーと協調して問題解決にあたることができる。</li> <li>6. 患者を全人的に理解し、患者・患者家族と良好な人間関係を確立し、予防を含む包括的なケアを提供できる。</li> <li>7. 医師としての社会的使命を自覚し責任をもった行動をとる。</li> <li>8. 世界の医学研究の動向を理解し、最新の医学知識を修得するために日々研鑽し、自己の向上に努める。</li> </ol>
行動目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 診療記録の適確な記載ができること</li> <li>② 診療記録や目標設定など日常臨床において、心身機能・構造—活動—参加という概念を使い分けることができる。</li> <li>③ 診断学として、電気生理学的検査、関節可動域、筋力、高次脳検査等を習得する。</li> <li>④ 予後予測、内科的管理、再発予防の要点、各種療法を説明できる。</li> <li>⑤ 疾患別リハビリテーションの該当疾患の診断、治療ができる。</li> <li>⑥ 疾患別リハビリテーションを理解し、適切な処方ができる。</li> <li>⑦ 学生・後輩医師・リハビリテーションスタッフに教育・指導を行うこと</li> </ol>

<p>方略 (LS)</p>	<p>①指導医の指導の下で、リハビリテーション領域における主治医となり、必要な診療・検査を行う。</p> <p>②週一回の総回診、週数回のカンファレンスに参加して報告を行い、指導医や看護師・リハスタッフと意見交換を行う。病棟やリハスタッフとの学習会・症例検討会に積極的に参加する。</p> <p>③地方会レベルの学会発表を行う。</p>
<p>評価 (EV)</p>	<p>研修医が到達目標を達成しているかどうかは、各分野・診療科のローテーション終了時に、医師及び医師以外の医療職が別添の研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを用いて評価し、評価票は研修管理委員会で保管する。医師以外の医療職には、看護師を含むことが望ましい。</p> <p>上記評価の結果を踏まえて、少なくとも年2回、プログラム責任者・研修管理委員会委員が、研修医に対して形成的評価（フィードバック）を行う。</p> <p>2年間の研修終了時に、研修管理委員会において、研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを勘案して作成される「臨床研修の目標の達成度判定票」を用いて、到達目標の達成状況について評価する。</p> <p>研修医評価票</p> <p>Ⅰ. 「A. 医師としての基本的価値観（プロフェッショナリズム）」に関する評価</p> <p>A-1. 社会的使命と公衆衛生への寄与</p> <p>A-2. 利他的な態度</p> <p>A-3. 人間性の尊重</p> <p>A-4. 自らを高める姿勢</p> <p>Ⅱ. 「B. 資質・能力」に関する評価</p> <p>B-1. 医学・医療における倫理性</p> <p>B-2. 医学知識と問題対応能力</p> <p>B-3. 診療技能と患者ケア</p> <p>B-4. コミュニケーション能力</p> <p>B-5. チーム医療の実践</p> <p>B-6. 医療の質と安全の管理</p> <p>B-7. 社会における医療の実践</p> <p>B-8. 科学的探究</p> <p>B-9. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢</p> <p>Ⅲ. 「C. 基本的診療業務」に関する評価</p> <p>C-1. 一般外来診療</p> <p>C-2. 病棟診療</p> <p>C-3. 初期救急対応</p> <p>C-4. 地域医療</p>
<p>責任者からの一言</p>	<p>リハビリテーション科（以下リハ科と略す）では、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、義肢装具士とのチーム医療による診療を日常不可欠の業務として行っており、チーム医療が実践できます。また、退院先の評価・調整を行うことや、多職種や家族参加カンファレンス、介護保険サービス利用の調整（ケアマネージャーとの連携）を経験することにより医療連携の実際を学ぶことが可能です。リハ科研修はリハ科以外を専門とする医師にとっても将来役立つ有意義な研修になると考えます。</p>